

特17 92

水島行楊述 明治四三年一月

聴教の
勸め
題

正教の勸め

改訂

第五版

人尊と
 ストス正教即ち
 眞の上帝の教を
 聴くことが必要
 であり、其の概
 略は此書中に述
 べてござります
 が、尙其地方の
 『正教會』に就て
 御講究になれば
 福であります。

259
955

020889-000-4

特17-92

正教の勸め

水島 行楊 / 著

M43

ABI-0723



通俗傳 正教の勸め

(ハリストス正教即ち眞の上帝の教を聽くことの

〔上〕 總論

「爾ノ耳ハ福ナリ、其聞ヲ得ルヲ以テナリ」〔新約マコトフ十三章の十六節〕此に掲げましたのは、新約聖書の言であります。我等の主唯一の上帝 イイスス

ハリストスは、此様に仰せになつて上帝の教を聽く耳を持つて居る者は誠に福であること云ふことを御論しになりました。

此にいふ上帝の教とは、これまで世の中にありふれた偶像などの教と違ひ、又人間の作つた虚の神の教ではない、唯一つの眞の上帝の教であります。即ち俗に「耶蘇教」と申してゐますが、その眞實の名は「ハリストス正教」となへます。又世に希臘教とも稱へられます、然ども何も希臘一國の教でもなく、勿論露國

明治 必要
3. 2. 5
4
内交

のでもなく、確かに全世界の公教であります。且つ國と國の實際は如何ならうとも宗教は宗教として断じて政治や軍事に混同さるべきではありません。ごらん通り正教は今に巍然として固く立てゐます、信者は依然として其信仰を守つてゐます、傳道者も常の如く傳道してゐます、眞理を愛する人は今も斯の教を聽てゐます、其は正教は上帝の福音である、永遠の生命を享る道であるからです。若も我らはいくら形の耳を持てゐても、目が有ても、義太夫を聽て芝居を見ておもしろいといふやうな流儀ばかりで、上帝の教を聽かず生命の道に就かなかつたならば、何の役にも立ちません。抑我等人間は、此形の耳の外に靈魂といふ者が有て、其に物を聽別る所の智慧もあり、道理を考へる所の心もあり、物事を識り覺える所の働もありあります。それで、いと尊い仁慈深い上帝様の御言を聽くことが出来る、之を聽て、目に見た如くに悟る事も出来るのは、即ち上帝の特別の恩寵で、ありがたい仕合せです。かく上帝の教を聽て悟るのは、之を信仰と申して、誠に人間の内で貴重な働きであります。昔上帝様の御弟子 聖使徒パウロと申すは此信仰のことを説明して『夫レ信仰トハ望ム所ヲ確認シ、見ザル所

ヲ 確證スル者ナリ』と申してゐます(エウレイの)而して此貴重な信仰と神妙な靈魂は、世界を御造りになつた上帝様が人間に御授けなされた所の特別の賜であります。此が有るから人間は、萬物の靈長と云て、世界中の寶よりも尊まれることが出来るのです。然ば我らは、此世界に土や木として造られず、畜生として生れず、乃ち最も尊い人間として生れ出たのは、一番に上帝造物主に向つて有難いと云ふ感謝の心を起さねばなりません。昔西洋の有名なる大哲學者は、自分が人間として生れたことを一番に上帝に向つて感謝したといふことです。實に我らが人間であることは最もありがたい理由ですが、併し形ばかりの人間では、未だ眞實の尊い所がありません。眞實の人間たる價値は、どうしても靈魂の方にあります。此靈魂が上帝と極めて親密の關係を有つてこそ甫めて眞の人となることが出来ます。それにはどうでも靈魂の聰慧即ち心の耳を善く聽えるやうにして、神の教を聽き(或は活ける教師から或は教の書物から)、之を守つて、上帝様から、汝は福な者だと云れる様にならねばなりません。

然るに世の中には、折角人間に生れて、結構な耳を持て居ながら、一向上帝の

教を聴かない人があります。此は實にお氣の毒なことです。然ども其人々には又相應に斷わる所の箇條があるのです。其箇條は勿論取るに足らぬ申分ですけれども、今我等は、此様な人々にも上帝の救ひを傳へて、福なる耳「即チ祝福セラル、者ヨ、來リテ國ヲ嗣ゲヨ」てふ福なる宣告を聴く所の――(マテイ二十五) 福なる天國の會員となられることを願ひたい爲に、此から逐一其箇條について辨明致しませう。

〔中〕

本論

「イサイヤノ預言應ヘリ、汝ラハ耳ニテ聽ケドモ悟ラズ、目ニテ視レドモ見ザラン」(マテイ十三)。

「一」最も多くの人が斷るのは、匆忙いと云ふことであります。教の善も悪いも無い、只「匆忙い、一寸の暇もない、其日々の用事に逐はれて、とても宗教など聴く暇がない、ことに日曜日だと云ては、教會に參り、祭日毎に祈禱に行くなどと致しては、忽ち其だけ會計の上に損が立つ」と申す方があります。成程説教を聴く一寸の暇もない、祈禱もせずで、三百六十五日夜も晝も働いたならば、お金は溜るでしやう、會計の上には大利得があるか知ませんが、その内部には(心靈上)非常な大損害がかくれてをるといふことに氣がつかないのは、この上もない不幸です。即ち靈魂の壯健を失ひ、永遠の生命を危くすることです。そも人間は、只金の番をする、だけに生れた者でも有ますまい。且つ其様に夜の目も寝ず

に、年が年中働きづめにして、明日をも知ぬ永の御暇乞と爲た時、其お金が能く上帝の前に立て我等の罪業を辨護してくれるか如何か覺束ない話です。又勤める人が、お勤大事に孜々と勉強で居るのは善いけれども、一週間に一回も教の話を聞くことも出来ぬ又教の小冊子一冊も讀む暇が無いと云ふ程に骨を折た結果は、此程骨を折ても、月給は昇てくれぬと云ふやうな不平に心を鬱ぎ、よし昇てくれたにしても、其で到底身體と心靈の疲れを回復して眞の平安を得ることはできない、矢張心配から心配、苦勞から苦勞ばかりです。つまり年が年中同じことを繰返して我は果して何の爲に生れて来たか、前途は果してどうなるか、たより無い話では有ませんか。成程忙しいに違ひはない、人間は斯世に生て手足が役に立つ間は、働くべき者ですから。何もせずに食客の食潰しをやつて居るのは、耻の極です。其で人間は、心で働くか、體力で働くか、どちらにしても、勞働は善い事です。ハリストス教で祈禱と勞働の二つは共に神聖な業として、大に勧められています。其處で勞働するのは宜しい、只斯世の働きの爲に、上帝を忘れてはならぬと云ふのです、餘り職業に度を過して、身體を傷め、靈魂の永遠の生

命を失ふてはならぬのです。若も勞働中に創傷を負るか或は病氣に罹て御覽なさい、幾許匆忙くても、醫師の診察を受なければなりません。病氣すれば痛い目を爲て入費を使ふて、我ら貧民は人參吞で首纏るといふようなあさましい境遇にも陥ります、何方から見ても損な話です。其でも仕方がない、病氣や創傷をしたのに暇がないと云て療治せずに棄て置く人は有ません。然ば今上帝の御言を聞き、若くは教の書物を讀んで之を信仰するのは、何も其様むづかしいことでは有ますまい。決して肉體の病氣や創傷を療治する程時日を費しません。又肉體の療治程に餘計な費用も要ません。只僅かな時間と僅かな志で靈魂の病が直る道に入られるのです。靈魂の病とは、罪のことです。或は『我には罪がない』と云ふ人も有ますが、人の心の底までも見透す所の上帝全知者の前には、此は云れません。奢り、高ぶり、虚言、妬み、誇り、怒り、惰り、貪り、邪淫、人を侮り、弱者をいじめ、強い者には諛て心にもない世辭を使ひ、陽に忠孝を唱へて陰に不品行を極めるなど、實に罪惡は汚い者です、算へ盡されぬ程有ます。此罪尤を上帝様は罰するのみではない、『悔て教に従へば赦す』と仰せらるゝのです。して見

れば、假令一日や半日の暇が費へたにしても、毫も損にはなりません。我等は上帝様に僅かな時間を獻げて、其代り上帝様から永遠窮りない福樂の生命を享るのです。實に獲る所は、失ふ所を幾千萬倍も償て餘りがあります。我等は若も法律上の罪を犯して、被告人となつたならば、假令大病で死かけて居ても、監獄へ連て行かれます。又罪は犯さずとも、只證人として裁判所に呼出を承た時、只匆忙いからと云て、別に正當な事由なくして出なかつたならば、忽ち罰金を申付られ、又拘引されることも有ります。此様に、只罰せられる爲に、又懸り合の迷惑の爲にさへ、假令何なに繁忙でも行なければなりません。上帝の教の方は、此と大に事かはり、罰せられにはない、赦されに行くのです。迷惑の爲にはない、悦ばしいことのためです。然ば幾許暇が無いからとて、全く一冊の小冊子さへ讀む暇がないといふ筈は有ません、全く教を聴く時間が無いと云ふ筈はありませぬ。暇があつても、人は多く其を勝手な方へ使ひます。人間は實際に一寸の暇もなくして、勞働續けで、生命が續く者ではありません。忙しいと云ふ人は、幾十年俟ても今日こそ教を聴くと云ふ暇はない、其内に漸々墓に近くなる、一時間も立

ぬ中に頓死することもある。其時に初めて教をきいたいと、思ふても、もう遅い、呼吸ある中に早く思ひ立て、上帝に就くべきです。

〔二〕或人は「正教といふ教は善いけれども、ロシアといふ國が氣に食はぬからどうも行かれぬ」と申します、併し茲に教と國とはつきりと區別が立てる、前にも申した通り、正教は決してロシア一國の私有物では有ません、尙支那から儒教を受け、印度から佛教を承繼だ、ような者です。誰も日清戦争が始つたからと云て儒教や漢學を止してしまはねばならぬと曰ふ人は有ません、其通り、正教は時の如何に論なく之を聴き之を奉じて、少しも國家に差支は、ありません、彼ロシア皇帝が正教會の長といふなどの説は、まるで大うそです、讒人のそら言です。正教會の長は、唯一の主イ、ス、ハリストスばかりであります。

〔三〕次に或人は私も耶蘇宗は善いと思ふけれども、餘り善過て、とても我等には守れないからと云て、斷ります。如何にも守れない、守れないから、上帝を頼むのです。我等に、空氣や、水や、太陽や、米や、花や、肉や、其他あらゆる必要な者を賜はつて、我身を養ひ、我身に力を附けて下さる所の上帝、父は、又我等の靈魂を

強うして、善い教を守るだけの力をも附けて下さるでしやう。我等は水の上を歩行くことが出来ぬから船に乗るのです。守れぬから、上帝を信仰せぬと云ふのは、丁度歩行ぬから船に乗らぬと云ふやうな者で、更に道理に合ひません。又此類の人は、是までの信者の中にも過つた人のあつたのを見て、『我も折角信者に爲ても、彼様に行状を過まると、却て教の名を汚すやうになるから、容易に教を領けない方がよい』と云て斷わる人もムります。此は一寸利口な申分のやうですが、遠慮も事に由るべし、或は餘り卑見識な話です。多數の信者中、少數の失敗が有たからとて、何も其に倣ふには、及ばぬこと、宜しく他の善い敬虔な信者の方を觀て行くべきです。其を斯様なことを云のは、つまり悔改をしたくない、歸正を拒む所の遁辭と外思はれませんが。古來道德家の證明する所に依れば、一日と歸正を遅延する程、悔改はむづかしくなる者です。何なれば罪と迷の習慣は時を延引するだけ、益々根が深くなるから終に死ぬるまで、此で充分守れるから愈々信者にならうと云ふ日はありません。故に思ひ立た時に、直と聽て、正義道には速かにつくのが宜うござります。

〔四〕又或方は、只分らない、幾許聽ても分らないから無益だと云て斷ります。固より聽く氣で無れば分らぬも當然です。主イ、ス、ハリストスの御言に『凡ソ耳アリテ聽ク者ハ、宜シク聽クベシ』と云て有ります(マトフエ福音の九)。

凡そ人間として形體の耳のない者は有ますまい。けれども上帝の教をきくのは、も一つ靈魂の耳がなくてはなりません。即ち上帝の言をきいて其いみを悟るはたらきです。若も此やうな耳のない者はしかたがない。故に我らは誰にでも無理に聞けよとは云はない。物の道理を辨別するだけの耳が有て、救はれたいと望む者の爲に勧むるのです。幾許聞ても分らないと云ふのは、其人の爲に耻でないとはいはれません。普通の人間ならばいくら分るべきです。もツとも一分一厘ものこらずまるで分つてしまふといふことは、どんな學者にもありません。殊に上帝の教は、限りない智慧の教で有るから、限りある人間の少しの智慧で悉く分る筈もない。其處で信仰が要るのです。信仰のことは、前に聖書の言を擧げて一寸申上げましたが此は智慧の上に働いて奥妙な事理を目に見たりも確かに認める事が出来ず。例へば我等は如何しても神武天皇に今拜謁する

ことは出来ません、然ども其大約二千五百年前に御存在で有たと云ふことは、毫も疑はない。又我等は地球の動くのを親り見ることは出来ません、然ども汽車の動くよりも確かに、信じて居る患者は其診察を受ける前に、一、二醫者の性行や學力や、毒を吞せぬか、調合を誤まらぬかと云ふことを吟味しない。只其人を信じて其盛てくれた薬を飲む。山里に入て烟が見ゆれば、火のあることも分る、人の棲で居ることも察せらるゝ、是皆信仰です。此信仰を以て上帝の教に向つたならば、何で分らないと云ふことがありまじやう。上帝が示されただけ、人々に必要なだけの事は分ります。私らは此まで毎度雨の降たのを見たからとて、とても明日愈雨が降るといふことを今日見ることはできません。けれども天氣豫報にも依らずして之を知ることのできるのは、つまり信仰のはたらきではありませんか。

〔五〕斯く申すと、何も其信仰の心が更に起らないと云ふ人があります。此も自ら起さなければ起りません。火を起さうとて炭ばかりで起る者では無い、第一マッチが必要で、枯枝か何かの燃料も無くてはならぬ。其通り、我等

は自ら勉めて信仰を起すことを望み、第一靈魂の光たる上帝様に向て祈らねばなりません。信仰は、實に上帝の賜です。其から勉めて心を正直に、公平にして、教を聴たり、聖書を讀たり、天地萬有を見て、靜かに考へたり、我が罪の深いことを思ふて、心を淨むるやう心掛け、終に聖書に云ふ所の鬼に拘攀られた子の父が上帝の子の前に涙を垂れて『主ヤ我信ズ、我が不信ヲ助ケヨ』(福音九章の四)と呼だやうに熱心の祈禱を以て上帝の助けを願へば、きつと篤い信仰の心は怡然起つて來ます。

〔六〕前々のは、只分らないと云ふのでした、が、今度は又口には分ると云て信じない人があります。我は耶蘇教をよく知て居る、聖書も讀た、何章に何と言てあるなど、云て、其實何も分らぬのです。聖書の文字ばかり讀で分る者ではない、『論語讀みの論語知らず』ではなくて、『聖書讀みの聖書知らず』と云ふやうな者です。此流は多く己が少許の智識に慢心して、上帝を侮るやうな連中です。又此類に教と云ば我は何々の教道を持て居る、其で道と云ふ者は分つて居るか、耶蘇宗は不要だと云ふ人もありますが、此は未だ上帝と人との區別が分ら

ないのです。人の中にも 全國民の罪と 刑罰を赦すの權は、獨り 天皇陛下にのみ 屬する。其通り 世界萬民の 罪と 永遠の罰を赦し、人の 靈魂を救ふ者は 上帝ばかりです。外に 教とか 道とか 云つて 皆人の 立てた者です、人の 立てた教では、此世 だけをどうか こうか 立て行くには 行かれぬ こともありませんが 愈御暇乞となつ て、救ひが ありませんから、其で 安心と 満足は 覺束ない 話です。善惡の お話だけな ら、何處にも ありません、けれども 靈魂の 救ひは 唯一つ 上帝の教に 在るばかりです。

〔七〕 其から 或人は 只老婆が 嫌ふ、友人が 勧告する 等と 只人を 恐れる 所から 断ります。此は 時勢遅れの 申分です。今の世に、マサカ 基督信徒となつたからとて 喰殺す者も 有ますまい。萬乘 至尊さへ 人民の 信仰には 御立入がないのに、何して 同じ 人民で 我々の 信教 自由に 容喩て 邪魔をする 權利が 有ましやう。此は 自分が 嫌ひなので、他に 托して 遁るゝ 氣味も あります。自分さへ 立派に 眞理を 認めたら ば、人が どう言はうと かう言はうと、そんなことは 構ふた者では ありません。

〔八〕 そこで 或所には、終に 自分の 淨からぬ 心を 覆ひ得ずして 自分から「人は 何とも 言はぬ けれども、私が 嫌ひだ、如何しても 聴かない、信じない」と云て、只亡

狀を呈す輩もないでは ありません。此は 又手の 附様が ない、聖使徒の 所謂「思念 虚妄、頑心蒙昧」の 極です(ローマ書二) 若も 我等から「あなたは 如何して 此善美な 上帝の教が 嫌ひなの ですか」と問へば、「如何してと云ふ 理由は 無い、只嫌ひで す」と答ふる ばかり、何が 嫌ひなの やら、何處が いやなの やら、更に 分らない。此 は 察するに、其人の 内に 潜む 所の 惡魔が 罪を 惜で 之を 棄させたくないのでし やう。實に 善を 嫌ふ者は、惡ばかりです、福なる 上帝の教を 嫌はせる 者は 惡魔で す。狼が 陷阱に 落て居るのを、人が 助けて やらうと 思ふて 傍に行くと、狼は 却て 人に 噛み懸ると云ふ やうな 流儀で、畜生なれば 仕様が ないけれども、苟にも 萬物の 靈たる 人間で ありながら、仁慈の 上帝 救世主を 嫌ひ 惡んで、罪を 赦さるゝと云ふ 福音を 憎み、「いや 己は 否だ、罪が 惜い、赦して 貰はずともよい」と云はぬ ばかりに 上帝の教を 反抗け、傳道者が、愛と 親切を以て 訪へば、或は 逃げ隠れたり、或は 妄言を吐て、門前拂ひを 命じたりする やうな ことが あつては、實に 哀しいこと であります。此は 昔の 大預言者が 申された「蓋シ 斯民ノ 心は 頑ニナレリ、耳ハ 聽クニ 慵ク、目ハ 自ラ 閉ヂタリ、恐ラクハ 目ニテ 見、耳ニテ

聽キ、心ニテ悟リ、轉ジテ我ガ彼ヲ醫サン』と云ふ御言(マトフエイ十三)に應ずる者でしやう。療治をせらるゝのが恐ろしいで、やはり病氣の儘で居たいと云ふのは、下恩の極ですが、マアそんな人は、めつたにない。只靈魂のことになると、人は至て無知冷淡無頓着になつて居ますから其様なことが澤山あります。罪の赦しが嫌ひで、上帝の恵みの聖手に救はれるのが否だと云ふのは右の身體の療治を嫌ふのより、まだ酷く禍ひの事でムります。何故なれば、身體の苦痛は死んで仕舞はば、其ぎりで、死體は焚ても、斬ても痛くも何ともない。けれども靈魂は何時まで活通しの者で、肉體と離れて靈魂獨りになれば、もはや斯世のやうな慰めもない、只今まで犯した罪で苦しむ一方ですから、其苦みは實に千萬の毒蟲に刺るゝが如く、炎々たる激しい火の淵に投られて焼るゝが如き非常な苦惱であります。之が虚と思ふ人は夜半萬籟静つて一穗の寒燈は將に滅なんとする時に、よく己が心に省みて、既往の罪過を調べて御覽なさい。又假に今自分は此から死ぬると考へて御覽なさい、とても平氣で悪口ばかりいふてはをられますまい。又愈々今死刑に處せらるゝと云ふ間際の囚人のことを

思ふて見るがよい。死は疊の上でも非常な強行力を以て我が生命を奪ふ者であります。或人は自分の死んだことを只夢に見てさへ、非常に苦惱を感じたと申しました、況て眞實の死に於ておや。正義の上帝を侮る人が、死んで後の苦惱は、今思ひやるだに身が戰慄やうです。されば我らは、かの色々な口實を設けて上帝の教をきかず上帝に就かない人に毎度いやがられても、終に彼様なお方も教を聽て喜んで救ひの道に入り相共に仁慈の上帝を讚美するやうになつてもらいたい爲に、嫌はれても之を云ふのです。それは今世でいきある中に上帝の教をきかない禍の耳は終に禍の宣告をきかねばならぬ、『我ハ汝ヲニ告グ、我ハ汝ヲガ奚レヨリスルヲ識ラズ、凡ソ不義ヲ行フ者ハ我ヨリ離レヨ』(ルカ十三)此は義なる上帝、世界の裁判者が畏るべき裁判の日に於て、凡その罪人と彼の靈魂の救ひに無頓着であつた人にお告げになるお言であります。

〔下〕 結 論。

『凡ソ 勞苦スル者 及ビ 重ヲ任フ者ハ 我ニ 來レ』(マトフエイ十)。

若も我らは、路傍に泣いてその親を尋ねてをる迷子を見たならば、いかに惻しく感ずるでしやうかの必ず速かにその親にあはせてやりたいと思ひましやう。所が我らも其様に、迷子となつて眞の父母を尋ねて居るのです。救贖の道に迷ふて眞の親、生命の親たる上帝、救世主を尋ねて居るのです。みんな幾分か此渴いた望が あればこそ、偶像邪神をも拜むのです、觀音様にも手を合せて祈るのです、天輪王にまで、助け給へと呼んで踊るのです。學者は亦學者相應に哲學とか科學とかに依て幾らか自ら慰めてをるのです。救ひを望む心は、皆人の中に在るは在る、けれども眞の救主を知らぬから、つまらぬ偽神に向ふ者もあれば、他の者は斯世の職業の忙しいのと慾張の爲に騒がしいので、つい忘れて居たり、又或者是悪魔に欺されて救ひでもない者を救ひと心得て、地獄に引張込れるのを

知らずに、悪魔に事へて居るのです。彼の救が嫌ひくと云て、上帝の救ひを恐れる輩の如きは、己れは只悪魔に依て救ひを得られると思ふて居るのでしやう。彼等は尙石で造へた不動でも御利益がある、狐の稻荷でも御靈驗があるなど、云てる事が ありました。石を拜む者は其心が石よりも頑なになり、畜生を上帝とする者は人間と生れながら、此世から畜生道に墮落したやうなものです。誠に上帝様の御恩寵を空うし、仁慈深い父に背いて仇敵に事へるとは、善くないことです。天の父なる上帝は全世界の多勢の人民の此やうな苦しい淺猿しい有様を見て、其可愛獨一子を御降しになり、少しの罪尤もない至美しいイノス、ハリストスを、十字架に懸て大勢の人々の身代りに立させられたのです。其ハリストス救世主の御手柄に依て我等を救ひ助けて下さるのであります。ハリストスの十字架は、西洋人の爲にも、東洋人の爲にも、南洋人の爲にも、古の人にも、後の人にも、總て關係つて居るのです。誰でも進で之を信じさへすれば、其御手柄の御恵みに干預ることが出来るのです。十字架は、即ち人々を悪魔の手下から取戻して、上帝之子とする最貴い寶であります、其で我等信者は、之を貴ぶのです。異教の人

たちは、わけを知らぬから、磔々と云て悪く言て居ますが、磔にまで懸つて全世界の人間をお救ひになつたのは、此イ、ス、ハリストスを置いて又と外に有ません。其で主イ、ス、ハリストスの爲には十字架が光榮の徽章です。我等の爲には、十字架が救助船です、罪の淵に於る靈魂の助け船です。仁慈の上帝父は天から憐みの御聲を掛けて、人々に、早く来て此船に乗れよと呼びてあります。至愛の子イ、ス、ハリストスは、熱き涙を以て、母鶏の雛を翼の下に集むるが如くに我等赤子を招て居られます。一日も早く、上帝の教を聴いて、一刻も早く、此有難い救の道に就くのは、何より肝心なことではありませんか(マコフエイ二十三)されば我らは今の中に早く上帝を信じて、救ひの洗禮を領ることが必要です。此様に肝心な大切な事であるのに、其を多忙いだの、分らないだの、國の爲民の爲にこそなることを人がいやがるだの、國體に叛くだのと、それこそ分らないことを曰て、其外何だのかだのと、口實を設けて、後へ後へと延した日には、何時まで経ても分らない。人の誹り話や、狸褻な歌や、寄席の物語などには耳を傾ける暇が有ても、上帝様の事には、一刻も耳を貸すことが出来ないとは、餘り恐ろしい

ことです。教を聴いて上帝様に就くのを延期する程、我等は上帝様の御招きを輕蔑して、己は益不信仰になるのです、愈己の罪を多くするのです。斯世には肺病だの、心臓病だの、胃癌だの、コレラだの、ペストだの、火事だの、洪水だの、地震だの、海嘯だの、暴風だの、飢饉だの、負傷だのと云て、數へ盡されぬ程恐しい病氣災難があります、假令今までは幾ら病氣災難を免れたとて、終に最後の死病死ぬると云ふ最後の災難を免れることは出来ません。其時にヤレ洗禮を領たい、教會のありがたい機密を戴きたいと云た所で、間に合ふことは保證れません。死ぬる時の苦しさを、神様のことも、救ひのことも、思はれないで、一言の遺言さへ得しないで果る人は澤山あります。頑なで悔る心のない者は只「上帝の怒りの日(羅馬書)即ち義き裁判の顯はる、日を待て」懼れ慄くばかりです。幾ら金が有ても、人爵が有ても、役に立たない、人は自分で靈魂を傷めることは出来ても、之を救ふと云ふことは自方では、決して出来ませんから、必ず他力即ち上帝、全能者を頼まなければなりません。何卒皆様御奮發なされて、此惟一つで又二つとな

ります。ハリストス 上帝の御言に『凡ソ 勞苦スル者 及ビ 重テ 任フ者ハ 我ニ 來レ、我ハ 汝ヲ 安ンゼシメン』と仰せられて あります(マツフェ、十一の)。

我ら 人間は 誠に 心を 安んずるを得てこそ、國の爲にも 家の爲にも 盡すことができ

るのです。而して 此様な 安らかな 靈魂 即ち 救ひの員に あづかる者となるには、どう

でも 誠の 親、天の父なる 活ける 上帝様に 就て 信仰と 悔改の 決心を 以て 罪の赦し

の 道に 従はなければなりません。斯く 我らが 皆様に 眞の 上帝の 教 即ち ハリスト

スの 正教を お勧め申すのは、何も 自分の 利益の 爲でも、愚かな 心の 爲でも ありませ

ん。實に ハリストス 上帝の 聖旨に 出たこと であります。上帝は 一人でも 多く 眞理

を 認めて 救ひに入る 者の 有る ことを 悦び給ふ 御方です。此世の 智者や、商賣人

は、自分で 何か 面白い 事や 新發明でも する ならば、永く 自分一人で 之を 秘密にし

て 置いて、全く 他人に 知らせまいと 企てます。けれども 憐み 深き 上帝は 世界 億兆の

民を 愛し、イウヂヤ人に 對しても、西洋人に 對しても、東洋人に 對しても、全く 一視

同仁です、只 其教を受くる 準備の 有無と 信仰 不信仰に 由て、傳道に 遅速が 有た

ばかりです。そこで 早く 先に 知て ゐた 國からは、未だ 之を 知らない 國々に 傳へ

既に 信じて ゐる 者は、未だ 之を 信じない 人に 知らせるのは、全く 上帝の 命令に 出

る 義務で あります。而して あなたがたが 之を お聴になつて 信仰を 決するものも 亦

天の父に 對する 一大義務で あるのです。



大尾

